

平成28年8月5日

平成28年度 第1回

東大和市総合教育会議会議録

東大和市教育委員会

平成28年度第1回東大和市総合教育会議会議録

1. 日 時 平成28年8月5日（金曜日）午後3時30分～午後4時44分

2. 場 所 東大和市中心公民館301学習室

3. 出席者 市長 尾崎保夫

教育長 真如昌美

委員 武石修一郎

委員 岩田圭子

委員 藤宮志津子

委員 新藤久典

4. 欠席委員 なし

5. 説明職員

学校教育部長 阿部晴彦

社会教育部長 小俣学

学校教育部
参事兼
指導室長

岡田博史

子ども生活
部 長

榎本豊

学校教育課長 岩本尚史

青少年課長 中村修

6. 書 記

庶務係長 福嶋まゆ美

主 事 平原覚仁

○議事日程

第1 市長あいさつ

第2 協議・調整事項

(1) 学校教育・社会教育の現状について

(2) 教育課題について

◎開会の辞

○尾崎市長 皆さん、こんにちは。

ただいまから、平成28年度の第1回の総合教育会議を開催いたします。

本会議は、東大和市総合教育会議運営要綱に基づきまして、会議を公開ということで、傍聴の方がおいでになる場合は、手続によって入室を認めるという形になりますけれども、今のところおいでにならないということなので、進めさせていただきたいと思います。

◎市長あいさつ

○尾崎市長 それでは、本日、今年4月に新教育委員会制度に移行してから、初めての総合教育会議ということになります。

これまでも、市長部局、私どもと、それから教育委員会ということで、連携しているというか、一緒になって東大和市の教育を充実させていこうという形で取り組んできたわけですから、特に方向性が新しい制度になったから変わるというような考え方は、私は持っていませんし、またこの大綱におきましても、私はこの教育目標を大綱にしようといったときに、これを見させていただいて、一番下の3行が気に入ったと。気に入ったという言い方はおかしいけれども、この3行が大切だということで、もうすぐに賛同させていただいて、今回の大綱に位置づけるという形にしたわけでありまして。そういったわけで、私自身も2期目は「日本一子育てしやすいまちづくり」ということで、教育というものの充実は欠かせないと考えています。

日本一子育てしやすいまちというと、最近はどうしても新聞等は、待機児童が何人いるとか、そんなことばかりでありますけれども、それだけでなく、教育ということで、学校教育も当然そうでありますし、それからもう一つ、私自身は社会貢献人口ということを増やしたいと思っているわけです。俗っぽく言えばボランティアということになるのかなというようには思いますけれども、そのためにはやはり社会教育というものをより一層充実していく。要するに、主体的に社会貢献をできるような、そういう市民の方々をもっともっと増やしていただかないといけないのかなと思っているところです。そういった意味では、社会教育とい

うものの充実も必要なのではないかなと思っております。

どちらにしても、教育委員会の教育方針ということで、いろいろなことがありますけれども、私どものほう、教育については特に施設のインフラということになりますかね、整備をするというのが、今の時点では最も大切かなと思っているわけございまして、耐震だとか、あるいは非構造部材だとか、これから始まるわけですけれども、そのようなものを順次進めてきて、ここで給食センターも当初の金額から比べると大分増えたのでありますけれども、貯金をしておいたおかげで何とか決断をして、もうじき、10月に順調にいけば、まあ順調にきているわけですから、10月には完成するというようなことを聞いているわけでございます。これからもそういった意味では一緒になり、同じ方向を向いて、東大和市の教育全般を充実させていければというように思っております。

新制度移行後ということになりますので、教育委員会の経営はどのような形になるのか、今後どのように力を入れていくのかということについて、教育委員会の話を聞かせていただければと思っております。そんな中からお互いに意見交換をしながら、共通認識の場に、この会議ができればと考えておりますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。

◎協議・調整事項

○尾崎市長 初めに、教育長のほうから、学校教育と社会教育ということで、経営方針についてのお話を聞かせていただければと思ひますので、よろしくお願ひします。

○真如教育長 それでは、私のほうから最初にお話をさせていただきたいと思ひます。

東大和市の教育長の任期が、本年の3月31日で満了しまして、その後、これまでこの教育委員会を支えていた委員長職がなくなり、新しい教育委員会制度で今現在、教育委員会の運営を進めているところであります。

新しくなっても何も変わらないということではなくて、当然新しくしたわけがあるわけですから、教育委員会が教育行政における責任をしっかりととるんだという、そういったことを意識して、そして教育委員会の審議の活性化、あるいは迅速な危機対応ができる体制をつくることや、また今日もそうですけれども、市長との連携強化を進めて、さらに東大和市の教育全体が活性化していくように努

めていきたいと思っているところでもあります。

社会教育、学校教育、両面について基本的な考え方としては、市民の期待に応えていく教育、それぞれ学校教育にしる、社会教育にしる、市民の方々が非常に熱心にかかわってくださっているおかげで、さまざま課題も見えてきているところですし、またこんなふうにしていったらどうだろうかという声もいただいております。そういった声については、しっかりと受けとめて、基本的にその具体的な取組を進めていきたいと思っているところでもあります。

社会教育部につきましては、社会教育課の事業と、それから公民館事業、図書館事業がありますが、社会教育課の事業ではプラネタリウムだとか市民運動会だとか、さまざまなアイデアを取り入れながら、常に新鮮な取組を進めていっているところでもありますけれども、より一層スピーディーで、また市民の方々が喜んでいただけるような、そういう取組にしていきたいと思っているところです。

それから、公民館事業につきましては、市民の方々がさまざまな学習機会を求めておりますので、それぞれの期待に応えるように、こちらも対応してまいりたいと思っているところです。

図書館事業につきましては、市民の方たちの情報の拠点としての役割はどうあるべきかということについて、さらに踏み込んだ形で考えながら、市民の方々の期待に応えていきたいと思っているところでもあります。

また、市長部局と一緒に取組について考えるということが、非常に重視されている時期にありますので、市長部局の方々とともに、東大和市全体を考えながら、社会教育の推進に取り組んでいきたいと考えているところでもあります。

それから、学校教育については、学校教育も学習指導要領が変わる時期が来ておりますので、それについての対応をしていかなければならないという大きな課題を目の前にしております。基本的には、やはり生きる力の育成というものを一番最初に掲げ、そして今年は特にさまざまな事業が展開されることが予想されますので、学校教育と教育委員会と一緒に知恵を出し合いながら、そして市民の方々の期待に応えていこうということを目指してまいります。

それから、3つ目としては、これももう私が教育長になってからずっと言い続けておりますけれども、学校は地域の学校であるという認識を持ち、地域の学校としての質を高めていくことに努力をしていきたいと思っているところです。

学校教育も、社会教育も、改善に向けてはスピーディーな対応が求められますので、できる限り素早く課題を受けとめた上で、具体的に、しかもスピーディーに改善することを心がけていきたいと思っているところであります。

先ほど市長からお話があった、全ての市民が教育に参加するということをしっかりと受けとめて、誠意を持って東大和市の教育の経営を進めてまいりたいと思っているところであります。

簡単ですけども、そういう気持ちでやっていきますので、どうかよろしくお願いいたします。

以上です。

○尾崎市長 ありがとうございます。よくわかりました。

今までと変わらないということで、いいんじゃないかと思っております。ただ、いろいろな言葉が出てきましたけれども、スピーディー、そして具体的にという言葉が何カ所も使われていますので、そういった意味では、これからは大切なことかなとは思っております。学校教育、教育そのものについては、私のほうからこうしてほしいとかというのは、なかなか言うことは、専門家ではございませんのでね、そういう点では難しいところはあるかなとは思っておりますけれども、この教育は、家庭、学校及び地域、それぞれが責任を果たしながらということですが、どうも学校、まだまだそういった意味では、地域の中の学校という位置づけでは、まだまだではないかなと思っております。

私も、教育委員会、役所に入った新人の青葉マークのときには、教育委員会に6年半ほどお世話になりました、現場ですね、学校現場が職場というか、場所だったものですから、学校の先生ともよくお話をする機会があって、よくけんかして帰ってきたんですね。「冗談じゃないよ」って、「俺は小学生じゃないぞ」って言いながら、もう1人、相棒の2人で帰ってくると課長が、帰ってくるとね、校長先生から電話があったらしくて、「やったのかね」と言うから、「いや、やったっていうか、失礼ですよ、あのしゃべり方は」とかね、そんなことでどうも印象的に余り良くないなというところもあったようですけれども、実際に教育委員会とか、こういう立場になってみると、また違った目線というかね、角度から見ると、学校の先生も大変だなというようなところもありまして、これからどのような形で変わっていくのかというか、変わっていかないと、多分成り立たないのではないかなというような思いもございます。そういった意味では、スピーデ

イーに、具体的にということ、これからも進めていただければいいのかなと思っております。

続いて、学校教育と社会教育の現状について、学校と保護者、家庭、地域の協力という観点から、お話を聞かせていただければと、各委員さんをお願いしたいと思います。

では、岩田さん、いかがでしょうか。

○岩田委員 私のほうから、学校訪問に行ったときの感想などを、ちょっと述べさせていただきますと思います。

まず、どの学校も落ちついた雰囲気であるなと感じています。それと、教職員の皆さんも、児童・生徒の皆さんも、とても気持ち良い挨拶をしてくれると私は感じています。授業の様子も、とても落ちついているように感じます。

また、学力テストの結果は、数値的にはまだまだ上を目指せると感じています。どの学校も意欲的にいろいろ工夫を凝らして、生徒に着実に力をつけさせる努力をしているのではないかと思います。

また、5月、6月にありました運動会なども見せていただきましたけれども、小学校の運動会は中学生のボランティアが多く手伝ってくれていて、とても頼もしく感じました。

各校、特色を出して、例えば聖火の入場とか、オリンピック種目の1,500メートル競技の記録をリレー方式で抜くということが出来るか挑戦するなど、特にオリンピック・パラリンピックを見据えた取組がところどころに見えるというようにも感じました。

また、いろいろな緊急な事態に備えて、例えば地震発生とか熱中症の対策など、きちんとマニュアルを作成していて、すぐに対応できるように備えていると感じました。特に気温の高い日だった学校では、種目を変更しながら、一時的に生徒を校舎に入れたり、涼しい部屋に入れ、休息の時間を設けて熱中症にならない工夫をされている的確な判断だったと思います。

また、どの学校も地域の方々の協力がとても大きいと思います。先ほど市長さんも申されましたが、地域との連携を密にして、これからもやってほしいと感じます。

あと、次に公民館まつりを視察して感じたことについてですが、会場の装飾、展示品の質の高さ、舞台の華やかな演出、模擬店での活気など、利用団体の皆さ

んの文化振興や地域との交流に向けた努力を感じました。何より参加者の皆さんの楽しんでる様子をじかに感じることができました。

今後、利用者の方々の高齢化が進み、実行委員を出すことに負担を感じるグループもあるようですが、公民館の役割を広く地域に示して、大勢の利用者の皆さんに頑張ってもらいたいと思った次第です。

以上です。

○尾崎市長 ありがとうございます。

学校と、それから保護者というか、家庭、地域との協力というのは、もともと大切なものだと言いつつも、なかなか難しいところもあるのかなという思いがあるんですけども、特に学校と保護者、それから地域ということで、いつも学校と地域ということだと、学校が本当に地域の公民館になってしまったのではないかなと思うようなところも大分、もう10年以上たちますかね、視察へ行ったときに、普通の高齢の方が、昼間、学校で授業をやっているときに正門から入って、廊下というのか——通って空き教室というか、余裕教室に行って、そこで民謡の踊りをやって、隣り方のあいているところでは卓球をやる会場があつて、そこで卓球をやるんだなんていう子どもがいて、そんな話を、そのときに音楽がかかってうるさいんじゃないかって質問したら、いや音楽の授業でも音楽は出ていますから大丈夫ですという話で。それと、やっぱり不審者だとか、そういうことはすごく心配するんじゃないですかって話したら、いやこれだけ地域の人が入ってくると、不審者は入ってこないですよという話もしていました。そういった意味では、まだまだ東大和市では、まだ改革というか、そういう開放の余地は十分あるんだなとは、私自身は思っているわけでありまして。ただその中学生、小中連携ってよく言っていますけれども、運動会、先ほど岩田さんのほうからお話がありましたように、中学生がボランティアで運動会の手伝いに来て、一緒になってやっているというのは、新しい形としていいのかなとは、そのときは思ったわけでありまして。

そういった意味で、少しずつでいいですけども、地域の中、あるいは小中の子どもたちのつながりというか、そういうようなもの、それからもう一つは、気持ちのいい挨拶ですね。まだまだと思いますけれども、何か大人のほうが挨拶ができないかなって、学校へ行って感じる時はありますが、子どものほうが挨拶をする確率が高いんじゃないかななんて思ったりするときもあります。役所もま

だまだというところもたくさんありますので、そういった意味ではこれからもしっかりとその辺のところは、私もやっていきたいと思ひますし、やっていければなとも思っています。

それから、あと公民館は、公民館、講座をやってとか、いろいろなことをやっていひますけれども、講座をやって、卒業してグループになって、公民館でというよなことをやっているわけですがけれども、もう少し主体的にというか、余り公民館の人がということではなくて、もっともっと広い活動をしてもらえるよな、そんなよなもの、新しい活動の方法というか、そういうのもあるのではないかなというふうには思っているわけですね。

また、ママ・マルシェというのが始まっています。始まって、3回ぐらひやったのかな。あれなんかも、結構、自分たちでいろいろなものを決め、企画、何もかも全てやって、会場はホールを使っていますけれども、あのよな、またあれは外に出ていこうという、要するにすごくそういう意識もあるところなんですね。今のままでいいというのではなくて、さらにもっとというよな意識のある強い団体かなというふうには思っています。そういった意味では、ああいうよな団体がもっともっと増えて、外に出ていく、活動を広げていくというか、そんなこともこれから進めていく必要があるかなと思ひています。

それから、あとは公民館でやっている事業として、私もお願いしたんですけれども、うどんづくりをやっていひますけれども、種をまいてから粉にしてうどんをつくるまで。あれなんかも、東大和市の農業という考え方じゃなく、農業に触れるというかね、そういった意味ではもっともっと大勢の人にかかわってもらいたいなと思うんですね。いずれは、東大和市の農地でつくったうどんの粉をつくって、小麦をつくって、粉にして、それで東大和市内のいろいろなところでやっている各イベントで、売るといふこともあつていいのではないかなとも思っています。そういった意味で、昔からのそういうよな東大和のうどん文化という、そういうよなものをもっともっとああいうところでも実践しながらやっても、おもしろいものができるかなと思ひているところです。ただ、そんなことも考えたりしてもいいのではないかなと思ひています。

それでは、次に視点を交えて、生徒の自主自立という観点で、お話を聞かせていただければと思ひます。

藤宮委員は、いかがでしょうか。

○藤宮委員 今のお話の中で、中学生がボランティアで、小学校の運動会に来てくれたのを見て、校長先生とお話ししたら、全部希望した人が来られないほどの希望があるって言われて、びっくりしました。頼もしいですね。

では、私のほうから生徒の自主自立ということについてですけれども、教育委員になってから、中学校の生徒さんとのかかわりが増えて、活動を拝見したりする機会をたくさん持つことができるようになりました。その中で、東大和市の中学生は、より中学生らしくなってきたな、大人に一步近づいてきているなど感じる事が最近多くなっています。

例えば、学校訪問に行ったときですが、どこの学校でも、廊下ですれ違うときには、生徒さんのほうから、「こんにちは」と気持ちの良い挨拶をしてくださいます。それも先生に言われてやっているような挨拶ではなくて、自然に出てくる挨拶ですから、表情もとても良くて、にこっとほほ笑みながら、頭をちょっと下げて廊下をすれ違ってくださいます。来校者にとっては、とっても気持ちがいいと思います。

あと校内を歩いていますと、至るところに生徒会が作成したポスターが掲示されています。授業に集中しよう、身だしなみをきちんとしようなど、自分たちから生活、規律を正して、学校を良くしていこうとする姿勢が伝わってきます。

そんな中学生の自主自立の様子は、社会を明るくする運動の中学生の意見発表会でも見る事ができました。市内の全中学校5校の発表でしたが、本当にしっかりとした意見発表でした。社会を明るくするために、今、自分たち中学生ができることとして、先ほどの積極的な挨拶や、相手を思いやる行動、夢を諦めずにチャレンジする姿勢など、工夫を凝らして発表していらっしゃいました。東大和市の中学生は、先生や親など大人に何かしてもらう中学生ではなくて、自分たちで目標を持って何かをしなくてはいけない、何をしなくてはいけないかをしっかりと考えて、それを友達と支え合って実行していく中学生なんだなと改めて感心、実感したところでもあります。子どもたちに豊かな心が育まれていると思います。

先日、社会を明るくする運動推進委員会が五中でありました。各校の校長先生や民生委員、保護司、PTA、警察、青少年対策委員の方々が出席されていましたが、合議制のすばらしい会だと私は思いました。そこで、アンガーマネジメント、すぐにキレるとか、強いほうから弱い者への怒り、アンガーマネジメントというお話とか、ストレスマネジメント、あと薬物についてのお話などもありまし

た。

8月27日には、中学生による小学校との連携をしいじめ防止の取り組みが、また中学生の意見を聞くことができますし、吹奏楽部の演奏もありますので期待をしています。

以上です。

○尾崎市長 ありがとうございます。

子どもたちの自主自立ということでは、中学校でいうと生徒会の活動というのは、非常に素晴らしいものがあるかなとは思いますが。

先ほどハミングホールでの意見発表会は、毎回、聞かせてもらっているんですけども、あれは聞く価値があると思いつながら、毎回、楽しみにしているイベントの一つだというふうに、私自身もしているわけです。それからあと生徒会活動は、いじめだとかスマホだとかということで、それぞれの学校の単独の生徒会の活動だけではなくて、全校、中学生の連合ということで活動したりと、素晴らしいなと思いますし、もっともっとこれから活発になっていっていただければなと思う反面、ぶっちゃけた話、私もそうだったんですけども、学校が終わると、授業が終わると、ぱっと家へ帰って、ああいう活動に一切、興味を示さなかったという、私自身がなぜ示さなかったというのはよくわからないんですけども、まあ余りおもしろくなかったしということもあるのかなというのは単純に。ただ、そういう子どもさん、要するにああいうような発表だとか、いろんな活動を一生懸命やっている子どもさんも大勢いるけれども、余りそういうのに興味を示さない、無関心だという生徒さんも結構大勢いるんだろうと思いますし、少数になりますけれども、ちょっとずれてしまったという子どももいるんだろうと思うんですね。

教育委員会から、いろいろなところでいろいろな発表を聞いたりとかすると出てくるのは、そういう輝かしい活動をしている子どもたちの活動内容とか、そういうのはよく聞くんですけども、余り興味のないような人たちは何を、生徒は何をしているんだろうと、何で興味がないんだろうとかいう話は余り伝わってこないということと、学校にも行きたくない、授業も興味ないと、どっちかという外れてしまったというような、一般的に言えばね、そんな子どもの話なんていうのは、トラブルとか何かない限りは出てこないということなので、そういった意味では、そういうようなところも、もっともっとスポットを当てて、しっかり

とフォローするというのも大切なのかなとも思ったりはしています。

特に挨拶については、いいかなというように思っております。東大和市にあいさつ通りというのが、今現在1カ所あるんですね。あいさつ通りってちゃんと書いてあるんですよ。教育委員会の人には知っていますよね。1カ所あるんですよ。ちゃんと、あいさつで明るい地域へとかね、あいさつ通り、あいさつをしようとか、ちゃんと幾つもわっと、その通りへ行くと看板が出ているんです。

七小でしたっけ。九小か。七小じゃなくて九小だ。芝中のところで、いろいろな地域の人、それからあと団地の、あそこは公団というのか、地域の協力だとか、いろいろな人が協力して、そういうようなものをやるというので、そういうようなものももっともっと広がって、地域の中でもそういうようなことが、点ではなくて線になって、面になっていけばいいかなとは思っているんで、九小のほうには、校長先生にも、それからあとPTAの人にも、それから青少対の人にも、一生懸命応援するから一生懸命やってくれってお願いはしていますけれども、何か協力があったら遠慮なく言ってきてくれということで、何か協力の依頼があったかもしれませんけれども、その節はぜひよろしくお願ひしたいなとも思います。

ありがとうございました。

それでは、次に豊かな心を育むということで、児童・生徒の健全育成、特に徳育ということについて、このあたりにつきましては先生というか、武石先生のほうは剣道の指導者ということで、長い間いろいろとご苦労なさってきたのかなと思っております。日ごろ、子どもたちに接している武石先生のほうから、求められる指導者の姿勢ということについて、ご自分自身の経験を通してお話を聞かせていただければと思います。

○武石委員 それでは、求められる指導者の姿勢ということなんですけれども、私自身、現在、高校2年生と中学1年生の子どもを持つ親でもあります。子どもに対しては、家庭において日ごろから学校生活や日常生活において、挨拶ですとか、言葉遣いですとかは、もう本当にきちんとするというのを、しっかりと伝えていきます。また、人には迷惑をかける行動をしないということも言っています。きちんとすることを言っています。また、人に対しても迷惑をかけないということも伝えていきます。

また、各委員さんからもたくさん挨拶の話が出ていますけれども、挨拶をきちんとすることですとか、言葉遣いをきれいに、丁寧に使うということは、お互い

に気持ち良く、人を集めたりとか周りの人を明るくし、友達もたくさん増えることだと思っています。

私は、東大和市で30年近く子どもたちに剣道を指導していますが、剣道を始めるきっかけとして親御さんが言うには、礼儀を学んでほしいですとか、体力をつけてほしいですとか、いろいろなことを言うてくるんですけども、もちろん剣道が強くなってほしいという方もいらっしゃいます。教えていて思うことは、やっぱり挨拶がしっかりできたりですとか、声が大きい子ですとか、そこがやっぱりその後の上達も、本当に見る見る上達するということが、今までいろいろと剣道を教えてきて感じるころでもありますし、そういう子はやはり友達も大変多い子が、やはり明るい子が、そういう上達ですとか、そういうところにあらわれると思います。

そのような子どもを見ていますと、やはりオンとオフの切り替えがしっかりできていまして、遊ぶときは遊ぶ、剣道をするときはする、勉強するときはする、集中して、試合をするときも相手をよく観察することができて、研究することもできます。ふだんから予定を自分で立てて、目標をきちんと設定して、目標を達成するためには何を、いつまでに、どうやって行うかという課題を、なるべく子どもたちには与えて指導するようにしています。あらかじめ準備をして臨むことは、行動に予測が立って、相手の動きをよく見て予兆を知ることができます。そして、予感を感じて、それも予感が確信となり、行動に移せるということにつながると思います。

剣道は、また個人の競技でもありますが、団体、5人のチームで戦う試合もあります。目標に向かって5人全員が同じ方向を見て、一人ひとりが責任を持って対戦することが求められます。負けたときに、自分のチームに、おまえのせいだとか、そういうことは決して言うてはいけないことですし、本人たちもそれは自覚して、言われれば悔しいですし、言った側も、まあ言った側もというか、言う子はまずいないと思います。そういうことも教えています。

そういうことで、試合に自分が負けたときですとか、自分が勝ったときも、やはり勝ったからには負けた相手がいるわけですから、その負けた相手に対しても相手の気持ち、立場を考えて行動するよということも伝えていきます。そういうことで、思いやりの心も生まれて、またチームの大切さも学べると思います。

学校においても、集団で生活を、行動することが多くて、共通する部分が多い

と思います。子どもたちには、オンとオフの切り替えをしっかりとすること、勉強やスポーツ、習い事においては、目標を立てて、その目標を達成するためには何をすべきか、いつまでにするかを明確にさせて行動することが、生活にメリハリがついて、自分の行動に責任を持って学校生活を規則正しく、楽しく過ごせることだと思います。

以上です。

○尾崎市長 ありがとうございました。

剣道ということで、私も子どもたちの剣道、先生のところの大会だとか、そういうことで見させていただいています。話は全然違いますけれども、昔、剣道をやらないかといって、練習でやったんですが、そのとき思ったのは、下手な人にたたかれるって、結構ずっと痛いという感じがするんです。うまい人にたたかれると、どんときてという感じですよ。やはりそこがちょっと違うかなって、段を持っている人にやられたときと、下手なやつにぽこっとたたかれるのと、やはりそのあれが全然違うというのをいまだに覚えています。やはり剣道というのは、集中するというか、先ほど言っていましたけれども、研ぎ澄まして本当の一瞬ということなので、よく見には行くんだけど、小学生ぐらいは動いている、こう見えるんだけど、もう中学生ぐらいになると、どっちがどう当たったんだかよくわからないくらい速いということなので、それをいかに速く先に打ち込むというのは、やはりすごく集中して、さっき言っていましたけれども、体で感じて、そして行動に移すというか、そういうふうなものがしっかりとできてくるというのは、集中したその訓練というか、そういうのが続いていないとダメなのかなというふうにも、そういった意味ではオン、オフの切り替えというか、そういうようなものがしっかりできているということが大切なんだろうなとも思います。

やはり一番最初に礼儀ということを重ねるということで、私もいつも、昔からなんですけれども、何事も3つだけとりあえずできればいいということで、挨拶をすることと、返事をするすることと、感謝をすること、この3つができれば大体問題なくなっていけるのではないかなって、自分自身ではそういうふうに思って、こうやってきたわけです。そういった意味で今のお話を聞かせてもらおうと、自分がやってきたことも含めて間違いでなく、いいことだったんだなということを改めて感じさせてもらいました。

それと、あと個人戦でなくて、団体戦もすごくあって、チーム内でのそれぞれの自覚というのが、組織の中の自分の個というかな、そのあり方というのもその中で考えられるということで、そういった意味ではすばらしいのかなと思っておりますけれども、指導者というのは、非常に子どもたちも千差万別、個性がありますので、その個性を生かしながら、それぞれの目標に向かって生かせるには、やっぱり苦勞があるかなと改めて今感じたところです。

ありがとうございました。

それでは、あとは大学のほうで実際に教鞭をとっておられます新藤委員には、ご自身の経験等を踏まえながら、教育委員の立場から見ての児童・生徒の育成のあり方、今後、身につけさせたい力等について、お話をさせていただければと思います。

また、これまで学校教育の話が中心だったので、社会教育施設のあり方などについても、お話しを伺えればと思いますので、よろしくお願いします。

○新藤委員 では、新藤でございます。今年、4月から教育委員をさせていただいております。よろしくお願いたします。

これからの子どもたちに身につけさせたい力ということですが、市長さんの話もありましたように、挨拶、感謝を含めて3つのことをしっかりしていればというお話がありましたが、特に何か特別な新しいものというわけではないなと思っています。やはり今、これまで培ってきているものを、さらに充実させていくところかなというところで話をさせていただきたいと思うんですが。

とは言うものの、やはり今、子どもたちがこれから生きていこうとする社会というのは、皆さんもご存じのように、専門家も答えを持たない複雑で世界規模の問題が本当に山積をしているんですが、それらをやはり市民が自分の足元で、誰かが答えを出してくれるのを待つのではなくて、やはり市民自身が自分の足元から自分で考えて、そして他者と共同して主体的に解決を図っていく、それでしか解決できない問題が、やはり目の前にあるなと感じています。そういう社会を生きていかなければならない子どもたちだからこそ、身につけさせたい力というのは、これまでも培って、やはり3つかなと思っていて、1つはやはりコミュニケーション能力ということかなと思っています。

ただ、このコミュニケーション能力なんですが、今、大学生なんかに聞きますと、見も知らない人たちとうまく共同して話ができることというような、曖昧な

捉え方をしているんですが、実は今から65年前、昭和26年に当時つくられた中学校、高等学校の学習指導要領の試案という中で、こういう言葉を使っているんですね。話すことなんですが、自分の意思を伝えて他人を動かすために、生き生きとした話をしようとする習慣と態度を養い、技術と能力を磨くこと。65年前の指摘なんですね。でも、これってまさに現在求められているコミュニケーション能力ではないかなと思います。誰とも自由に話をするのではなくて、やはり自分の伝えたいことがあって、そしてそのことによって、やはり相手を動かして、そしてより良い方向に動かしていく、解決していく、そういう意欲とか態度、それとそれを可能にする技術と能力、それらがコミュニケーション能力なんだと。こういう、もう一度、コミュニケーション能力の定義を考え、改めて指導していくことが大切かなと感じているのが1点です。

それから、2点目ですが、今ずっと言われていますように、新しい学習指導要領の改訂が進められておりました、アクティブ・ラーニング等は言われていますけれども、やはりそういった中でも言われていることというのは、やはり自分で考える力というのが非常に重要になってくるかなと思っています。どちらかというと、今、子どもたちの実態としては、自分で考えるのではなくて、何か誰かが答えを出してくる。その答えを、早く記録して覚えていくというようなことが、学習だと勘違いしている子どもたちもいるわけですから、そうではなくて、結局やはり人任せではなくて、先ほども話がありましたが、今、世の中、自分で考えていく力というのを、ぜひつけさせたいな、そのためにやはり主体的に学ぶということを、学校はきちっとやっていかなきゃいけないのかなと感じています。

それから、3つ目なんですが、これがやはり日本のちょっと弱いところかなと思うんですけれども、より良いもの、より高いものを求めていく力。先ほどの武石先生のお話の中にもあったと思うんですけれども、やはりもっと強くなりたいとか、もっと良くなりたいとかって、そういう心こそが大切なかなと思います。

ところが、日本青少年研究所が平成23年、24年ごろに行った国際比較調査によると、特に社会に関することなんですが、社会のことは複雑でかわりたくないと思っている中学生、高校生が4人に3人という結果が出ています。もうこれはアメリカや中国、韓国と比べて極端に高い数値なんですね。やはりそういった面倒なことから逃げているというところは、やはり日本のちょっと弱さかなと思う。そうすると、結局、より良い社会とか、幸福な人生というのは、自分で求めて、

自分で行動していくことによってしか得られないわけですから、まさに今の世の中、そういった意味で子どもたちに、そういう力を身につけさせていく。これまでもやってきたことばかりですけれども、もっとそれを充実させていく必要があるかなと感じているところです。

それから、もう一ついただいた社会教育施設のあり方等ですが、やはり社会教育ということを考えますと、先日も日本の平均寿命が延びて、女性が87歳、男性が82歳とありました。そういった長い人生をより豊かに、そして幸福に生きていくためには、やはり生涯にわたって学び続けるということを推進していくしかないと思うわけですね。そういう意味では、社会教育、生涯学習というのはとても重要であり、そういう意味で社会教育施設の果たす役割というのは非常に重要になってくるかなと。

そうしますと、やはり大人になってから社会教育施設を知るのではなくて、もっと小学生や中学生、高校生の間から社会教育施設にかかわっていくということが大切かと思います。そうしますと、そういう社会教育施設は、家庭や学校に次ぐ安心安全な場所であるという、そういった意味での、そしてそこへ行けば、いろんな年齢層の人たちと交流ができる。そこへ行けば、自分のさまざまな学習ニーズを発見して、その解決のための方法等も見つけることができる。そういう意味で、安全であり、そして何よりも安心であり、そして同じ市内に住む市民と大人たちと交流しながら、より良いものを求めていくというような、先ほど申しましたこととつながっていく、そういう施設なのかなと思います。

それと同時に、やはり子どもたちにとっても、また市民にとっても、先ほどありました、尾崎市長さんもおっしゃいましたけれども、自分でもっと、この東大和市を住み良い、よりいい社会にしていくという、そういう意識を生み出させる場所としての社会教育施設である必要もあるのかなと思います。そういう面では、社会生活、人生において、先ほどありました、生涯にわたって学び続けていく、そういう場と、同時に何を学ばなければいけないのかということ、この東大和市がどういう社会を求めているのか、市民を求めているのか、そういうことについても発見をして、みんなと一緒に共同して学んでいける場所、そんなふうな社会教育施設になっていくことが求められているかなと思っています。

ちょっと口幅ったい言い方をいたしました、以上でございます。

○尾崎市長 ありがとうございます。

教育のほうについて、コミュニケーションとか、いろいろとお話がありましたけれども、難しくてよくわからなかったというところも、正直な話あるわけでありませう。

私は、市長になったとき言われたんですが、普通の市民が市長になったって言われたんです。支援してくれた人に。そういった意味では、私は普通かなというようには思って、普通というのが一番大切なのではないかなという思いもあるわけですがけれども、ただそのコミュニケーションというか、対話するというところで、最近、今、先生の話聞いてて思うのは、何というか、ピッピッピッピって、そういうので対話、話はできるけれども、会って話すと、また違ってしまったというところで、直接、生身の人間同士が本当に話し合うというか、そういうのがだんだん薄れていくのかなというところで、やっぱりコミュニケーションの基本は対面というか、そういうようなものがあるのではないかなとの思いも、先ほどちょっと話をさせていただいたわけです。

自分で考える力というのは、やはり必要だなと思うわけでありませうけれども、覚えることじゃなくて、考えることということなので、その考えるための方法というか、どうしたら考えられるのかとか、そういうようなものを主体的に考えられるような子どもを育てるって、抽象的に言うといいけれども、具体的にやるとなると非常にそれぞれ子ども、それぞれが違うのでというふうには、いつも思うわけでありませうが、いつもうちのほうの市民への広報などで、いろいろなものを出しているんだけど、市民の人は知らない。それは、「いや市報に出ていますよ」って言うんだけど、「知らない」ってね。だから、知らせるといっても、知らせ方、要するに市民、千差万別いる、子どもも千差万別だから、それに知らせる、まず知らせるといふかね。子どもが、あるいは大人がそれを知って考える。その上で、行動するというところではないかなと思うんです。

やはり教育というのは、そういった意味では、どう知らせる、そして知って、ただ知るだけでなく、そこから次の考えるという行動にどう移していけるかというのは、非常に大切だというように思いますし、また難しいことなのかなというように思うんです。大人だって、子どもと余り接してないけれども、大人だって千差万別で、もうぐちゃぐちゃという人もいますしね、またきちっとしている方も大勢おいでになりますけれども、そういうようなことで、それぞれの個に合わせた形で教育の場でやっていくというのは、大変かなというようには思いま

す。そういった意味では、これからもそんな考えられる、主体的に考えていけるような、そんな子どもさんをどんどん育成していただければと思います。

社会教育は、公民館の社会教育の場というか、確かに社会教育という公民館ということでは言われますけれども、でも公民館だけでなく、社会教育はあるのではないかなと思うんですよね。公民館というものは、一つの生涯学習の場だということなので、我々はそういうように思うのかもしれないけれども、一般の人はそんなふうには思っていないのではないかなと思うんですよね。

例えば、ここに青少年の課長さん、おいでになっていますが、やはりあそこの青少対だとか、地域の中で任意で活動している人たちも、あれも立派な、教育という言い方は語弊がありますけれども、公民館で学習している人たちと同じように、一つの目的を持って意欲的に活動しているということだから、立派な生涯学習というか、活動じゃないかなって。

だから、そういう、先ほど言った社会貢献人口というか、そういうような形でもっともっと増やしていくというか、そういう場というのが公民館には求められる。また、具体的に施設になると、余り自信を持って、いいぞと言う自信はないというのはあるんですね。ただ、耐震をやったから、とりあえずは、とりあえず1回目は安全だなと。いつも思うのは、中央公民館にしても、ほかの公民館もそうなんだけれども、きれいなというか、つくって、本当にそういった施設として作りたてのようなきれいなものはないと。確かにね、つくってもうえらい時間がたつものばかりだから、そろそろ壊して改修を考えなきゃいけないというんだけれども、そういうような意味での建物は無いけれども、私は汚いものは、施設はだめだって言っているんですよ、いつも。要するに掃除だとか、そういうのを含めてきちっとしているということが、きれいだということだと思っただけなんです。だから、いろいろな施設へ行ったりとかするとき、いつも職員にもよく言うんですが、掲示板に張ってあるのが傾いていたりとか、きれいじゃない、やはりきちっとしているから、すかつね、たとえ掲示板が薄っすら汚れているような、古いような掲示板でも、張ってある新しいチラシとかそういうのが、ピピピッと張ってあるときれいなんですよ。

そういう意味では、この中央公民館の正面のところから左にある案内掲示板、あれは汚い、きれいではないって思うから、帰りに見ていってください。あれをきれいだという人。汚れているとか、そういうことじゃなくて、きちっとしてい

るかどうかできれいが、汚れてたってきちっとしているときれいに見えるんですよ。あれは、だから汚いんですよ。

だから、そういう意味での東大和市の施設というのは、まだまだだと思えるところはあるんですけども、ただいつも市役所の庁舎にしても、学校にしても、どこへ行くときも、行ったときに「どうぞ」と言って、そこでお茶を飲むということは一切、基本的にはしないんですね。必ずどこか、あっち行ったり、こっち行ったりするんです。その施設を見てみたいと思うから。めったに見られないわけだから。

だから、そういうことをすることによって、そういう意識を持ってもらうということによって、きれいな、古いけれども、きれいな施設だと思えるんですね。これはやはり意識の問題だということで、そんな簡単に右から左に変えられるものだと思わないけれども、ただ続けるということは絶対必要だなと思います。そういった意味では、そのような職員というか、利用者も含めて、そんな方々がどんどん公民館の活動、社会教育の中で育っていただくと、いいのかなと、今、感じたところであります。

ありがとうございました。

次は、最後に、最近の教育課題について幾つか状況を確認したいと思います。

せっかく事務局、担当部長、参事、課長等がおいでになっておりますので、いろいろとお話を聞かせていただいて、簡潔に説明をしていただければと思います。

8月25日から2学期がスタートするということでもあります。夏休み明けというのは、気持ちの切り替えが難しく、いろいろと配慮することもあるかなと思いますけれども、「いじめ防止対策推進法」が施行されて3年がたちます。当市はいじめの未然防止に力を入れておりますが、そのあたりについてお話をちょっと、説明をお願いできればと思います。

はい、どうぞ。指導室長ですね。では、座ってでいいです。

○岡田学校教育部参事兼指導室長 ありがとうございます。

それでは、いじめの未然防止の取組についてでございますけれども、今年度も6月、11月、2月の年3回、児童・生徒、それから保護者を対象に、友達とのかかわりアンケートとして調査を行います。

もし、このアンケート調査で、気になることがありましたら、学校ではすぐにその対応策について、管理職を含め組織で対応する体制を整えております。また、

いじめに関する授業を、どの学年も年3回は実施するようにしております。例えばですが、弁護士とか警察署の方などを講師にお招きいたしまして、授業を行っていることもございます。

教育委員会のほうでは、今年度もいじめ防止のためのシンポジウムを開催いたします。今月の8月27日の土曜日でございます。この中央公民館ホールで行います。今年度は、中学生による小学校と連携したいじめ防止のための取組といたしまして、小学生も参加しまして地域の方々とも意見交換をする予定でございます。そのような形で、いじめの未然防止という取組については、そのほかにも画面にございますけれども、そのほかにもいじめ電話相談とか、スクールカウンセラーの全員面談というようなことも行っているところでございます。

以上でございます。

○尾崎市長 ありがとうございます。

いじめというのは、ないにこしたことはないと思うわけです。これはいろいろなことが言えるんですけども、実際にいろいろなことが起きたときに、どう対処するのかということが、非常に大切なのかなと思います。万が一の場合に、備えも必要ではないかなと思います。

これはいじめというだけではなく、それ以外のことについても、いつも、特に3・11以降、思うのですけれども、原子力発電所は安全だということで、あそこから放射能が漏れることはないという前提できているから、今回みたいなことになってしまった。あれは漏れるかもしれない、もしかしたらこんなになるかもしれないということを、もし想定して訓練していたら、結果は違ったのではないかなというような思いもあります。

そういった意味では、いじめ以外にもいろいろなことがあるのではないかなと思いますので、あったときにどう対処するかというのは、エピペンを打つというのがあるじゃないですか。アレルギー等で、ショックを起こしたときに、ピッと何か打つ。あれだって、ふだんから練習していなかったらできないですよ。その子どもがふだんはどうで、それで持ち歩いているのかどうかとか、そういうのを含めてやっているから、何回か対処して、うまく対処できたというのがあるけれども、やはりそういうのは実際に訓練をしたりとか、起きたときにどうしようか、こうしよう、ああしようということをやっているから、これはいじめも同じだと思うんですよね。あったときに、どうしようということをしつかりと対応し

ている。

あと、今年で3回目、アメリカンサマー・キャンプ、この辺の英語、べらべらしゃべれる子どもがたくさん増えた。私、英語、全然だめなんですけれども、古典もだめだし、漢文もだめなんですけれども。

では、その辺をちょっとお話を、指導室長ですか、よろしく願いいたします。

○岡田学校教育部参事兼指導室長 ありがとうございます。

このアメリカンサマー・キャンプについてでございますけれども、今お話ありましたように今年度で3回目となりました。先日の7月29日、金曜日から31日、日曜日の2泊3日で実施してまいりました。その時の様子が、この写真にございます。今年度も30名の募集人数に対しまして、それ以上の応募者数となりまして、抽せんをいたしまして参加者を決定いたしました。各中学校から2年生、3年生を対象といたしまして、初めての参加の人を優先いたしました。年々、英語に対する興味や関心の高い生徒が集まってきていまして、3日間、ネイティブのアメリカ人と交流を通しまして異文化を感じたり、コミュニケーション力を高めたりすることができ、今まで以上に積極的に人とかわれるようになったようでございます。最後のお別れのときは、涙を流す生徒もいたということでございます。この体験を通して、留学したい、英語検定試験を受けてみたい、積極的に英語を話したいと、さらに今後の自分の夢や目標を明確に持てたようでございます。

実際に、ちょっと映像がございますので、ご覧になってください。

これは、夜にキャンプファイヤーをやるので、その練習を体育館でしているわけですね。男の子も、こうやって、声を出しながら踊っているような、そんな様子をちょっとだけご覧いただきました。

以上でございます。

○尾崎市長 ありがとうございます。

これは3年目、終わりか、これで。まあ、それは後でしっかり考えてもらって。

○岡田学校教育部参事兼指導室長 そうです。ぜひ、続けていきたいなと思います。

○尾崎市長 では、続きまして、教育長日誌にあったプラネタリウム、メガスター、利用者が増えているというようなことがありましたので、その辺の話を社会教育部長からお願いします。メガスター。

どうぞ。

○小俣社会教育部長 今、市長からお話いただきましたとおり、平成26年の3月で

ありましたが、20年使いましたプラネタリウムを最新のメガスターⅡBに買いかえさせていただきました。リニューアルをする前の平成24年度の観覧者数というのは、約1万5,000人でした。その後、リニューアルをして、その後、26年度は約1万8,000人ということで2割増えたんですね。歳入のほうも2割5分の増ということで、大幅に増えたという状況でございました。

その後、平成27年度について、ここで数字が出たんですけれども、約1万6,600人ということで、26年度をやや下回ってしまったという状況でございます。社会教育課のほうでは、そういう危機感もある中で、平成26年度と27年度、近隣市の校長会にお邪魔をしまして、ぜひメガスターを見に来てくださいというPRといたしますか、営業といたしますか、そちらをいたしました。その結果につきましては、平成24年度は3市から8校、来てもらっていましたが、その説明に出向いたりして、その結果、27年度の結果につきましては、4市から9校ということで、少しではありますけれども、市外からプラネタリウムを見に来る学校が増えていると、効果が出ているという状況でございます。

また、新たな取組として、27年度には子どもたちを対象にしてワークショップをしました。これは子どもたちに、プラネタリウムを実際に操作をさせるとか、体験をさせる中で、新しい取組をし、子どもたちにどんどん来てもらいたいというような取り組みをしてみました。グラフのほうも、ご覧いただくとわかりますけれども、このグラフ、年間を通して来館者数、観覧者数がどうなっているかと、3年間、並べたものなんですけれども、これ見ますと、伸びているところは7月、8月の夏休みと。当然、夏休み、プラネタリウムを見に来る子どもたちも含めて観覧者が増えていると。逆に11月、12月は少ないということも、ここでわかった状況、こういう表にしてわかった状況もでございます。

担当のほうでは、こういうことも考慮しながら、年間を通した行事を検討して、今後、観客数をもっともっと増やしていきたいと考えているところでございます。今後も最新のメガスターⅡBを駆使して、遠くからでも、お金を払ってでも見に来てくなるような内容を、ぜひ投映をしてやっていきたいと思っているところでございます。

簡単でございますが、報告とさせていただきます。よろしく申し上げます。

以上です。

○尾崎市長 ありがとうございます。

伸びているけれども、また落ちてしまったりとか、いろいろな努力はしていただいているということは、私のほうもよくわかるわけですが、数字は正直なものですから。ただ、言えるのは、メガスターという形でやっていますけれども、多摩六都にあるのはギネスに登録されているくらい星の数ができる、多摩六都にあるものは、ギネスに登録されているくらい星、要するに映せる星の数が多いということで、ギネスに載っているらしいんです。まあ世界一という数は、そういう意味で。だから、そういうのが近くにあるということを絶えず意識しておかないと。だから、あそこはメガスターという、そっち方面ではカリスマ的な方のつくった機械だということなので、そのメガスターを生かすということを考えないと、多摩六都では、星の数はたくさん映せても、うちのメガスターⅡBでは——にはできないと。そういうふうなものを目いっぱい前面に出してやっていると、多摩六都ということを持っていかれてしまうという気がします。だから、そういった意味では、先ほど言ったように、お金をたくさん払ってでも見たくなるようなということで、大いに期待をしたいなと思います。

あとはあそこにいるボランティアの方々も、もっともっと活用するという言い方はおかしいですけども、もっといろいろなものを勉強しながら、それで高校生も天文だとか、それから中学生の中にも、そういう子どもがいるということは間違いないと思いますので、高校生なんかも話、東大和高校の子どもにも話して、本物のプラネタリウム、動かす気にならないとか、もしあるんだったら連絡よこせよって話ししたりして、中学生にもそんな話はするんだけども、私が言うのと全然よこさないんだよね。だから、ちょっとほかの方法を考えなければいけないかなと思って。だからそういう子どもたちと話をしたりとかすると、それに興味を持っている子がいるということは結構いますので、そういう子どもたちを集めて新しい何かを、企画をすることによって、そんなことも特に夏休みは増えるということなので、そんなことも含めて考えてもいいのではないかなと思います。

ありがとうございました。

それでは、一応、最後ということになるんでしょうか、放課後の対策ということで、市長部局が中心になって今進めているわけですが、これまでも教育委員会といろいろと情報の共有を図って、ご協力をいただいているというところがございますけれども、現状の状況についてどうなのかを、子ども生活部長のほうから説明をお願いしたいと思います。

○榎本子ども生活部長 子ども生活部の榎本でございます。

学童保育所の現状ということでご説明したいと思います。

先ほど教育委員さんの懇談会の中でも、ご報告したところでございますけれども、現在の今年の平成28年4月1日の学童保育所の申請、それから待機児童数の状況についてご説明をしたところでございます。954名の申請のある中、学童保育所に入れているのは80%弱、8割弱の750名余り、約750名ということでございます。待機児童数、211名おりますけれども、その全員を学校の協力によりまして、2校、第二小学校と第四小学校の教室では、ランドセル来館におきまして60名余りのお子さんを受け入れ、さらに150名のお子さんにつきましては、市内全児童館、6館におきましてランドセル来館で受け入れをしているというようなところでございます。

今後につきましては、さらなる学童への入所拡大につきましての担当部としての考え等を、担当部の案でございますけれども、ご提案をというか、させていただいたところでございます。実際には、施設整備には非常に財源、それから時期、期間もかかりますので、授業の終わった学校の教室を転用して使わせていただければ、一番早く待機児童の解消になるのではないかとというようなご提案を勝手にさせていただいたところでございます。

それから、今、放課後子ども教室というのを全学校で放課後、行っているところでございます。その状況のご説明をさせていただきまして、それから国が定めております放課後子ども総合プランに基づく市の行動計画ということで、放課後子ども教室と学童保育所の連携ということで、昨年度から市内3校で学童保育所の児童が放課後子ども教室に参加するというような試行を、試しを昨年度から始めたというようなご報告をさせていただいたところでございます。今年度は、さらに小学校3校で学童保育所の児童が、放課後子ども教室に通うという試行を、さらに3校で行いたいというようなご報告をさせていただいたところでございます。放課後につきましては、やはり学校の協力がないと、なかなか計画どおりに推進できないようなところもございますので、今後もより一層、学校、教育委員会のご協力をいただけたらと思っておりますところでございます。

以上です。

○尾崎市長 ありがとうございます。

大分いろいろな面で進んできているのかなとは思っていますが、ごく単純に、

余り難しく考えずに、子どもから見たら、遊ぶ場がいろいろなところであればいいというようなことだと思うんですけども、遊ぶという場をどう考えるかって、子どもは結構いろいろなところで、ほんのちょっとしたことでも工夫しながら、結構楽しく遊びを見つけるかなと思っています。ただ、安全にということになると、なかなか難しいものがあるかなと思っています。そういった意味では、学校の施設が、使えれば一番いいと。学童クラブで、わざわざ学校が終わった子どもがそこに行ってなんていうことでなくて、そのまま、先ほど武石先生が言ったように、授業をやっているときはオンで、終わったらばしゃっとオフに切り替えて思い切り遊ぶというような、そんなような環境が一番いいのではないかなと思います。そういった意味では、放課後子ども教室も、全校で全日でやると、全ての日でというくらいのつもりにならないとだめかなと思っています。

そのためにどうしたらいいかというのは、ぜひ教育委員会のほうでも考えていただいて、スピーディーに、具体的に対策を示していただければと思います。何が障害なのかというのも、もっと明確にする必要があると。私自身、何でできないんだらうなっていうも思っているんですけども。何が障害になるのかというのを含めて、少し対応を検討していただきたいなと思いますので、よろしく願いいたします。

それでは、いろいろとご意見をいただきまして、ありがとうございました。

時間の関係も、一応、予定どおりでしょうかね。余り意識せずにやってきたんですけども。まあ、そういったことで、一応、一通り好きなことを私もお話をさせていただいたわけございまして、そういった意味では、これからも皆さん方も、もう2回目でしたっけ、3回目になるんですよ。3回目、ではもうそろそろなれたから、思い切って好きなことを言ってもらったほうがいいのかもしれないし、次は思い切って時間をぐっととって、好きなことを言ってもらいたいというようなことも、いいのではないかなという思いもあります。どちらにしても、今回は教育委員会の制度が新しくなったということで、そういった意味で第1回目ということになりますけれども、こんな形で意見交換をもっともっとできればかなと思っています。そのような議論を深める中で、学校づくり、より良いまちづくりに取り組んでいければと思っていますので、どうぞよろしくお願いいたします。

◎閉会の辞

○尾崎市長 次回の日程等につきましては、改めてご案内をさせていただきます。

よろしく申し上げます。

どうもありがとうございました。

午後 4時44分閉会